２０２４年度
大学院奨励研究員研究報告書

2025年　　3月　　17日

関西学院大学学長　殿

奨励研究員

氏　　名	澤村　勇希　　印

指導教員

所属・職名	文学部・教授
氏　　名	小野　久江　　印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	ADHD症状を有する成人の抑うつ状態に対する臨床心理学的介入の有効性およびその関連要因の検討
採用期間	２０２４年　４月　１日　～　２０２５年　３月　３１日

研究科委員長･研究科長印	研究科受付印

提出先：　所属研究科事務室

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	Yuki Sawamura, Hitomi Hirokawa-Ueda, Reiko Taketani, Hisae Ono	論文題目	Attachment Styles and Parenting Attitudes in Adults With “Pseudo-Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder”		
	雑誌名	Cureus		巻号	発行年月	掲載頁
				16(9)	2024年 9月28日	1-10

雑誌論文	著者名	澤村勇希・廣川（上田）ひとみ・竹谷怜子・小野久江	論文題目	成人期のADHD症状に及ぼす親の養育態度の検討		
	雑誌名	心身医学		巻号	発行年月	掲載頁
				65(3)	2025年 4月25日	未定

図書	著者名		論文題目		
	書名			発行年月	頁
					総頁：
					担当箇所：

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	第65回日本心身医学会総会	開催地	一橋講堂
題目	自らADHDを疑う成人における親の養育態度と愛着スタイルに基づく病態分類	発表年月日	2024年6月29日

学会名	第21回日本うつ病学会総会	開催地	大阪国際交流センター
題目	ADHD症状の有無別での繁忙感が抑うつ状態に及ぼす影響の検討	発表年月日	2024年7月12日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（３０００字程度）

■研究の背景

近年、診断の有無を問わず注意欠如・多動症（attention deficit/hyperactivity disorder : ADHD）の症状を呈する成人が増加している。この一群は、対人関係上の困難さを抱えやすく、非適応的なストレス対処方略をとる傾向があるなど、種々の心理的困難に直面しやすい可能性が報告されている。しかし、その臨床心理学的特徴についての実証的研究は依然として不十分であるのが現状である。また、診断の有無を問わずADHD症状を有する成人の抑うつ状態は高く、これが生活の質を低下させる可能性があるが、この一群の抑うつ状態に対する臨床心理学的介入法の有効性を検討した研究は存在しない。さらに、ADHD症状を呈する成人の中には、疑似的にADHD様症状を呈する者が混在する可能性が指摘されているが、この一群の臨床心理学的特徴についての実証的研究は行われていない。

■研究の目的および意義

本研究の目的は、診断の有無を問わずADHD症状を有する成人の臨床心理学的特徴を実証的に示し、社会適応をさらに困難とする症状として重要な抑うつ状態に対する臨床心理学的介入法の有効性を探索的に検討することであった。さらに、疑似的にADHD様症状を呈する一群を「Pseudo ADHD」と新たに名付け、その者の臨床心理学的特徴についても検討した。本研究により、医療機関や教育機関などの臨床現場においてADHD症状を訴える成人に対して、より適切な病態理解と効果的な介入を実施するための知見が示されることが期待される。さらに、「Pseudo ADHD」の臨床心理学的特徴についての解明が進むことで、疑似的にADHD様症状を呈する者と神経発達症としてのADHD症状を呈する者の鑑別に貢献できると考えた。

■研究経過

本研究は、研究Iから研究VIIより構成されており、これらすべての研究は既に完了している。研究Iから研究IIIでは、診断の有無を問わずADHD症状を有する成人を対象として、その臨床心理学的特徴について検討した。研究Iでは、親の養育態度が成人期アタッチメントスタイルを介して成人期のADHD症状に及ぼす影響過程を検討した。その結果、日常的な良好ではない親の養育態度が不安定な成人期アタッチメントスタイルを介して成人期のADHD症状を呈する可能性を高めることが示された。研究IIでは、親の養育態度が成人期アタッチメントスタイルを介して抑うつ状態に及ぼす影響過程を検討した。その結果、親の養育態度が成人期アタッチメントスタイルを介して抑うつ状態に及ぼす影響過程は成立しない可能性が示唆された。研究IIIでは、成人期のADHD症状が抑うつ状態を悪化させる過程において、対人ストレスイベントがどのように媒介するのかを検討した。その結果、成人期のADHD症状が対人ストレスイベントを介して抑うつ状態を悪化させる影響過程が示された。

研究IVおよび研究Vでは、診断の有無を問わずADHD症状を有する成人に対する臨床心理学的介入法として、対人関係カウンセリングに着目し、その有効性について検討した。研究IVでは、診断の有無を問わずADHD症状を有する成人の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリングの有効性を探索的に検討した。その結果、対人関係カウンセリングが診断の有無を問わずADHDの症状を有する成人の抑うつ状態に対して長期的効果を有する可能性を示唆した。研究Vでは、診断の有無を問わずADHD症状を有する成人の抑制課題負荷時における前頭前野の活動性に対する対人関係カウンセリングの有効性を探索的に検討した。その結果、対人関係カウンセリングが抑制課題負荷時の前頭前野の活動性を増加させる可能性が示された。

研究VIおよび研究VIIでは、児童期にはADHD症状を有さず成人期になってから初めてADHD症状を強く自覚する一群を「Pseudo ADHD」と新たに名付け、その臨床心理学的特徴について検討した。研究VIでは、「Pseudo ADHD」者、成人期ADHD患者、健常者における親の養育態度と成人期アタッチメントスタイルの違いを検討することを目的とした。その結果、「Pseudo ADHD」における父親の冷淡支配的態度の割合が健常者に比べて高い可能性が示された。研究VIIでは、親の養育態度が成人期アタッチメントスタイルを媒介して「Pseudo ADHD」のADHD様症状に及ぼす影響過程を検討した。その結果、良好ではない親の養育態度が成人期アタッチメントスタイルの不安定化を促し、「Pseudo ADHD」のADHD様症状を呈する可能性を高める影響過程は成立しないことが示唆された。

以上の研究結果は、診断の有無を問わずADHD症状を有する成人の臨床心理学的特徴を理解するための一助となるだけでなく、保健医療、教育、福祉など多岐にわたる分野において、ADHD症状を有する成人に対するより適切な支援や介入を実施するための理論的および実践的な指針を提供するものであると考えられた。

■**謝辞**

この度は、大学院奨励研究員としてご支援を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。博士論文「注意欠如・多動症の症状を有する成人における臨床心理学的特徴および介入法についての研究」を提出し、審査を経て、博士（心理学）の学位を取得することができました。また、大学院奨励研究員として採用いただいた期間中には、筆頭著者として査読付き国内学術誌1編「澤村勇希・廣川（上田）ひとみ・竹谷怜子・小野久江（2025）．成人期のADHD症状に及ぼす親の養育態度の検討．心身医学，*65*(3)，掲載頁未定.」および査読付き国際学術誌1編「Yuki Sawamura, Hitomi Hirokawa-Ueda, Reiko Taketani, Hisae Ono（2024）. Attachment Styles and Parenting Attitudes in Adults With “Pseudo-Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder”. *Cureus*, *16*(9), 1-10.」を公表し、さらに筆頭演者として学会発表を2回行うことができました。なお、本研究の成果につきましては、2025年1月14日に本学F号館にて開催された博士論文公開発表会にて報告いたしました。